

---

# ヘッセの『夢日記』と『デーミアン』 の成立

小 澤 幸 夫

---

## 目 次

はじめに

1. 『夢日記』が書かれるまで
2. ヘッセの深層心理学に関する見解
3. 「鳥」のモチーフ
4. 「アプラクサス」とユングとの出会い
5. 「デーミアン」の名の由来
6. 『デーミアン』に対する自己評価

## は じ め に

1996年、ヘッセ全集や書簡集の編集者であるフォルカー・ミヒェルスによって公刊された „Traumgeschenk“ の中で、はじめてヘッセの『夢日記』(Traumtagebuch)の全貌が明らかになった。これは1917年7月9日から1918年8月20日まで、ヘッセが自分の見た夢を綴った日記で、本の形で175頁にも及ぶ大規模なものである。これは当時精神分析療法を受けていたラング博士に見せるために書いたものと考えられている。その中には両親や妻、三人の息子や友人たちと並んで、ニーチェやノヴァーリスなどの文学者や、フロイ

ト、ユング、ラングなどの深層心理学者の名が見られる。その内容は日常生活の残滓や少年時代の思い出、さらには自慰行為や夢精にいたるまで、「心の体験やファンタジーといったものだけをできるだけ偏見なくを記述<sup>1)</sup>」したもので、それぞれの夢について自己分析を試みているのが注目される。特に1917年9月29日迄の日記は『デーミアン』執筆中に書かれたもので、これにより「鳥」のモチーフや「デーミアン」の名の由来などについて多くの新しい事実が明らかになった。本稿では『夢日記』のこういった箇所を中心に取り上げ、『デーミアン』との関わりについて詳しく考察してみたい。

## 1. 『夢日記』が書かれるまで

まず始めに『夢日記』が書かれるに至った経緯を見ておこう。

1914年7月第一次大戦が勃発した。ヘッセは最初自ら進んで志願兵を名乗り出たが、これは急に国粹主義者になったからではなく、戦場にいる友人たちへの連帯感からであった。だが強度の近視のため採用されず、結局「ベルン・ドイツ捕虜のための図書センター」(Die Bücherzentrale für die deutschen Kriegsgefangenenfürsorge Bern)のために働くことになった。ヘッセは情熱を持ってこの任に当たり、自作の『アウグストゥス』や『アヤメ』などを「ドイツ捕虜文庫」(Bücherei für deutsche Kriegsgefangene)に掲載し、また『ドイツ抑留者新聞』(Deutsche Internierten Zeitung. 1916-17)と『ドイツ人捕虜のための日曜だより』(Sonntagsbote für die deutschen Kriegsgefangene. 1916-18)を編集、発行し、自ら発送した。このように戦場の兵士達に対しては骨折りをいとわないヘッセであった。

1914年8月ドイツが中立国ベルギーに侵略するに及び、ヘッセは憤慨した。彼にとって特に我慢できなかったのは、「文化人」たちがここぞとばかり戦争

---

1) Hermann Hesse: Traumgeschenk (=TG). Hrsg. von Volker Michels. Frankfurt am Main: Suhrkamp 1996, S.51.

を礼賛し、敵国憎悪を煽り立てていることだった。彼は1914年11月3日の『新チューリヒ新聞』に「おお友よ、この調べではなく」(O Freunde, nicht diese Töne!)を發表し、ナショナリズムと戦争の非を訴えた。この題名は言うまでもなくベートーヴェンが『第九』でシラーの詩に書き足した部分から採ったものである。人類愛を歌った題にふさわしく、ヘッセは次のように述べている。

「ゲーテは1813年には愛国歌をつくらなかったけれど、劣等な愛国者ではなかった。彼はまったく独特にドイツを知り愛していたが、彼にとっては、ドイツに対する喜びより、人類に対する喜びのほうがまさっていた。彼は、思想や内的自由や知的良心の国際世界における市民であり、愛国者であった。もっともよく思索する時には、彼はきわめて高い境地にあったので、諸国民の運命が彼には、もはや個々の重要性においてではなく、全体に従属した動きとして現われてくるのであった。(中略)ドイツの思想家や詩人のもっともすぐれた人々が生きて来た精神は、まさにそれなのである。その精神を思い起こさせること、正義と抑制と礼節と人間愛など、その精神が含んでいるところのものを思い起こさせること、それをいつもより今こそなさねばならない時である。(中略)戦争の克服は、昔も今も、われわれのもっとも高貴な目標であり、西洋的キリスト教文化の最後の帰結である。(中略)人生が生きるに値するということが、あらゆる芸術の究極の内容であり、慰めである。人生を賛美する人がみな死ななければならなかったとしても。愛は憎しみより高く、理解は怒りより高く、平和は戦争よりけだかいということ、そのことを、こんどの不幸な世界戦争こそ、われわれがかつて感じたより深くわれわれの心に焼きつけなければならない。その他に、戦争は何の役に立つのだろうか。」<sup>2)</sup>

---

2) Hermann Hesse: Gesammelte Werke (=GW), Frankfurt am Main: Suhrkamp 1970, Bd. 10, S.414ff. 訳は高橋健二氏(角川文庫, 1969年)によった。

このような高貴な訴えだったにもかかわらず、その結果は非難と悪罵を受けたにすぎなかった。ドイツの新聞はこぞってヘッセを「裏切り者」、「反逆者」などと罵った。ヘッセを弁護したのは、後の西独大統領となったテオドーア・ホイスや国会議員で弁護士のコンラート・ハウスマンなどごく少数だった。それだけにフランスからロマン・ロランが手を差し伸べてくれたのは嬉しかったに違いない。ヘッセは1914年から19年にかけて25編ほどの論文を発表し、後に一冊の本にまとめて『戦争と平和』と名付けて1946年に出版したが、この本は、その二年前に亡くなったロランに捧げられている。その序文を見てみよう。

「私はこの論文集の最初のもの（＝「おお友よ、この調べではなく」）が出来た1914年の重苦しい日々起こった多くのことを忘れてしまったが、この論文に対する唯一の好意的な反応としてロマン・ロランからの手紙が彼の著書の予告とともに届いた日を忘れることができない。私と道を共にする者、同じ考えをもつ者、戦争と戦争による精神異常の血なまぐさい無意味さを私と同じように感じ、それに対して立ち上がる者がいた。（中略）私は戦争中も戦後もロランと政治の話をしたことはまったくなかったが、彼が側にいて友情を示してくれなかったら、あの数年を持ちこたえられたかどうか分らない<sup>3)</sup>。」

ヘッセは1922年に刊行した『シッダールタ』の第一部をロランに献呈した。二人の友情の記録は1956年に公刊された『往復書簡集』に結実している。

不幸は私生活でも起こった。1916年3月8日には父が亡くなった。続いて三男マルティンが脳膜炎にかかった。子供たちのことで夫婦の間にいざこざが起こり、妻に精神病の兆候が現われ、ついには入院するに至った。ヘッセ自身も神経衰弱に陥り、ルツェルンの近郊にあるゾンマツト病院に入院し、4月から5月にかけてホッツ博士（Dr.Hotz）とブルー教授（Prof.Hans

---

3) Ebd., S.544f.

Brun)のもとで治療を受け、同時にラング博士 (Dr. Josef Bernhard Lang) から精神分析療法を受けるようになる。

この頃の様子をヘッセは友人への手紙で次のように報告している。

「目下のところ美しい物事に時折心を動かされることはあっても、嬉しくなることはない。もし長いこと胃のなかにある石が本当に消化できたなら、また嬉しい気分になることもあるだろう。だからいろいろと疑念はあるのだが、医者にかかる以外に方法はないのだ。現在三人の医者にかかっている、三人が共同で治療に当たっている。多くの事柄で意見が非常に異なっており、治療を受けている私の自我が時折最後の抑制中枢の役割を果たさなければならないほどだ。一人はこの医者、私のサナトリウムのおじさんで、食事療法などの助言をし、入浴、冷水浴、マッサージなどを処方し、ここを取り仕切っている。二人目はハンス・ブルーンだ。彼は昨日私の胃の中をポンプで汲み出し空っぽにしたが、結果はまだ分からない。三人目は精神科医で、彼の治療は私にとってもっとも重要なだけでなく、もっとも興味深いものだ。三人ともいい医者だが、<sup>4)</sup> 医者として天才的なのはブルーンだけだ。」

この三人目が当時35歳だったラング博士である。ヘッセはこの病院で12回の診療を受けた後、一年以上にわたりラングのもとに通いさらに60回の診療を受けた。彼はヘッセに深層心理学について多くの知識を与えるとともに、医者と患者という立場を越えて親交を結び、それは後にヘッセが精神分析に対して距離を置くようになってからもラングの死まで続いた。ラングは『デーミアン』ではピストーリウスのモデルとなり、『東方巡礼』では占星術師ロンゴス (ラングのラテン語名) となって登場する。

---

4) An Walter Schädelin am 3.5.1916. In: Volker Michels (Hrsg.): Materialien zu Hermann Hesses „Demian“, Erster Band (=MI), Frankfurt am Main: Suhrkamp 1993, S.73.

## 2. ヘッセの深層心理学に関する見解

ラングの治療を受けるとともにヘッセは自分でもフロイト、ユング、ブローラー、シュテーケルなどの著作に親しむようになり、多くの新たな認識を得るようになる。先に述べたように『夢日記』は1918年8月20日まで続けられるが、同年6月に書かれた『芸術家と精神分析』(Künstler und Psychoanalyse)の中で、ヘッセは精神分析について次のように述べている。

「フロイトの『精神分析』が精神科医という狭い範囲を越えて多くの人々の関心を引き、フロイトの弟子ユングが無意識の心理学とタイプ論を作り上げ、一部公表してから、さらに分析心理学が直接、民族の神話、伝説、文学に目を向けてから、芸術と精神分析の間に、緊密な、実り多い接触が生じてきた。(中略)特に、芸術家がこの新しい、いろいろと実り多い観察方法に親しむことが期待された。(中略)この比較的新しい科学的な心理学に関心を持ったことは一度もなかった私自身にも、フロイト、ユング、シュテーケルなどの著作の中で、新しく、重要なことが言われているように思え、それらをたいへん生き生きした関心をもって読んだ。総じて言えば、彼らの心の事象に関する解釈の中で、私が詩作や自分自身の観察から得た予感のほとんどすべてが証明されているのを知った。予感や一時的な思いつき、ぼんやりした知識として、部分的にはすでに自分のものとなっていたものが、言明され、定式化されているのを見たのであった。(中略)さらにもう一つ鍵が出来た。——絶対に有効という魔法の鍵ではないが、価値ある新しい考え方、新しい素晴らしい道具であり、その有用性と信頼性は<sup>5)</sup>すぐに証明された。」

これに引き続いて、ヘッセは精神分析が芸術家に与える三つの保証を挙げ

---

5) GW10, S.47f.

ている。

「まず第一は、空想、虚構の価値の保証である。芸術家が自分自身を分析的に観察するなら次のことを隠すことが出来なくなる。つまりそれは、彼が悩んでいる弱点の一つが、自分の職業に対する不信、空想の価値に対する疑念であり、市民的観念や教育を正しいものとし、自分の一切の行為を『単に』美しい虚構にすぎないものと片付けようとする他人の声を自らの内に感じることである。しかしまさに精神分析は、彼が時折『単なる』虚構としてしか評価できないものが、まさに非常に高い価値を持つものであることを、はっきり教えてくれるのである。そして彼に、精神的な根源的要請が存在することや、あらゆる権威的な尺度や価値判断が相対的なものであることを思い出させてくれるのである。つまり分析は芸術家に自らを保証してくれるのである。<sup>6)</sup>」

これが第一の保証である。これだけでも大きな収穫であるが、精神分析を単なる知識としてとらえるだけではなく、体験としてとらえようとするものにはさらに大きな収穫がもたらされる。

「精神分析の道を、すなわち、精神の根源を記憶、夢、連想から探求することを真剣にさらにもう一步つっこむ者は、永遠の収穫として『自己の無意識的なものに対するより密接な関係』とも呼べるものを得る。つまり、より親しい、より実り多い、より情熱的な、意識と無意識の間の往復を体験するのである。彼はふだん『意識下』にとどまっていて、注目されない夢の中でだけ起こることがから、多くのものを明らかにすることができるのである。<sup>7)</sup>」

最後に第三の保証が来る。

「そしてこれがまた、倫理的なもの、個人の良心に対する精神分析の成果と密接に結びつくのである。(中略)分析は何よりも自分自身に対する

---

6) Ebd.,S.50.

7) Ebd.,S.50f.



真実、我々がなじんでいない真実を要求する。我々がまさしく極めて上手に心の中で抑圧していたもの、何世代にもわたって絶えざる強迫のもとに抑圧してきたものを見、認識し、探求し、真剣に受けとめることを教えてくれるのである。(中略)この教育し、促進し、鼓舞する分析の力を芸術家ほど創造的に感じるものはない。というのは、彼にとって重要なのは、世間とその道徳にできるだけ安直に迎合することではなく、彼自身が意味している一回的な存在だからである。<sup>8)</sup>

この文章が1918年7月16日の『フランクフルト新聞』に掲載されたのを読んだフロイトは8月23日にヘッセに次のような感謝状を送っている。

「ペーター・カーメンチント以来、あなたの作品を楽しく読ませていただいている一読者として、あなたがフランクフルト新聞に書かれた『芸術家と精神分析』に感謝し、あなたに握手させていただきます。<sup>9)</sup>

一方、ユングとは1917年9月7日にベルンのホテルで初めて会い、グノーシス主義や中国の話をしている。中国の話というのはおそらく老子や易教についてであろう。ヘッセもユングも古代中国哲学について強い関心を持っていたし、ヘッセの父には老子に関する著作もあった。

なお蛇足であるが、ヘッセは『芸術家と精神分析』の中で、ユングをフロイトの弟子としているが、実際には、フロイトはフランスでシャルコー、ベルネームについて学び、ユングはスイスのブルクヘルツリ病院でブロイラーの助手として働いていた。二人はそれぞれ独自に患者の治療に当たっているうちに無意識の世界につきあつたのである。ユングは、1913年フロイトと決別した後、自分の学問をフロイトの「精神分析」(Psychoanalyse)と区別して、「分析心理学」(analytische Psychologie)と称している。そして無意識を扱う心理学を、アードラーの「個人心理学」なども含め、一般に「深層

---

8) Ebd., S.51f.

9) Volker Michels (Hrsg.): Hermann Hesse. Sein Leben in Bildern und Texten. Frankfurt am Main: Suhrkamp 1979, S.162.



心理学」と呼んでいるのである。

ヘッセはこうして深層心理学の助けを借りて自己の内面を見つめるようになるのだが、精神分析を単に「知識」として学ぶだけではなく、「体験」するために『夢日記』をつけ、自己分析し、さらにラングのところに持っていき、共同で分析したのである。

### 3. 「鳥」のモチーフ

『夢日記』の最初は「<sup>10)</sup> 昨晚ルツェルンからベルンに帰ってきた。」という書き出しで始まる。ルツェルンはラング博士の住まいがあった所であり、ベルンは当時ヘッセが住んでいた所である。ゾンマット病院で12回の診療を受けその効果を確信したヘッセはその後1916年6月から翌年の11月まで、毎週ラングのもとに通いさらに60回の診療を受けることになる。ヘッセはこの治療により、自分の葛藤が個人的で病的なものでなく、元型的な行動様式の現実的な変形であること、神話や人類の過去の経験の中に似たようなものがあることを教わったのである。<sup>11)</sup>

初日にあたるこの日（1917年7月9日）の日記にはまだ夢の記述は見られないが、「鳥」に関して次のような興味深い叙述がある。

「昨日汽車の中で新しい一節が口元に浮かび、しばらくの間たいへん美しいものに思われた。

歌え、わが胸の内なる鳥よ！

私はこの先を作り、詩にしようとした。鳥は魂 (Seele) で、小さな家の中に捕われている。けれども、その先は出来なかった。<sup>12)</sup>

これを読んですぐに思い出すのは、1916年3月8日に亡くなった父の墓碑

---

10) TG, S.49.

11) Vgl. MI, S.17.

12) TG, S.50.

銘に刻まれていた聖書からとった次のような言葉である。「縄はちぎれた。鳥は自由だ。<sup>13)</sup>」

「鳥」に関しては8月4日の日記にも次のような記述が見られる。

「ここベルンの私の庭に似た庭（先ほどまで息子の一人が一緒だった）。私のほかは父と一番上の姉だけ。道の中を覗くと、藪の背後に鳥が半分隠れたように立っており、その後とびはねながら去っていくのが見える。私は父に鳥を見るよう注意を促す。鳥は大変美しく彩り豊かで、大きな色鮮やかな尾をしていた。父と姉は後を追っていったが、速く駆けすぎるので、私はもっと注意深くするよう警告した。鳥は道の上をさらにとびはねていった。後で彼らは私に、本気でそうしようと思っているのかどうか分からないなら、撃ってはならないと言った。<sup>14)</sup>」

「鳥」のモチーフは『デーミアン』の中で重要な役割を担っている。そもそもデーミアンとシンクレーアが最初に交わした会話のテーマがシンクレーアの住んでいた家の門の要石についていた鳥の紋章についてだった。この紋章はシンクレーアの家とはまったく関係がなく、この家が以前修道院のものだった時代の名残であった。デーミアンはシンクレーアに「一度よく見てみたまえ。ああいうものは非常に興味があることが多いよ。あれはハイタカだと思っ<sup>15)</sup>ね」といって、注意を促す。

青年になったシンクレーアはベアトリーチェと自分で名付けた女性にプラトニックな恋をする。彼女を描くと、それがデーミアンの顔のように見え、また自分自身を描いたようにも思えてくる。こうして彼女を自分の内に取り込んでしまうと(アニマの意識化)、再びデーミアンへの憧れが強くなり、あ

---

13) GW10,S.133. なお、もともになった聖書の詩篇124.7では「われらは野鳥を捕えるわなをのがれる鳥のようにのがれた。わなは破れてわれらはのがれた。」(日本聖書協会, 1972年)となっている。

14) TG, S.62.

15) GW5, S.30. 以下『デーミアン』の訳は高橋健二氏(新潮文庫, 1972年)によるが、一部筆者の手を加えた部分もある。

る晩夢を見る。

「その夜、私はデーミアンと紋章の夢を見た。紋章はたえず変わった。デーミアンはそれを両手にとっていた。小さく灰色だったかと思うと、ひどく大きく多彩だったが、いつもおなじものだと、彼は私に説明した。最後に彼は、その紋章を食えと、私に強要した。それを飲み込んでしまうと、飲み込まれた紋章の鳥は私の体のなかで活動を始め、私の体中に広がり、内から食いへらした。それを私は非常な驚きをもって感じた。死にそんな恐怖でいっぱいになって、私は飛びあがり、目をさまし<sup>16)</sup>た。」

シンクレアはこの鳥の絵を描き始める。

「できあがったのは、鋭い精悍なハイタカの頭をした猛鳥だった。それは半身を暗い地球の中に入れ、その中から、さながら大きな卵から出ようとするかのように苦心してぬけ出ようとしていた。背景は青い空だった。その絵を長く見つめていればいるほど、それは夢の中に出てきた彩色の紋章であるように思われた。<sup>17)</sup>」

この絵をデーミアンの昔の住所に宛てて送ると、不思議な方法で返事が届くが、それには次のように書いてあった。

「鳥は卵の中からぬけ出ようと戦う。卵は世界だ。生まれようと欲するものは、一つの世界を破壊しなければならない。鳥は神に向かって飛ぶ。神の名はアブラクサスという。<sup>18)</sup>」

卵の殻は、シンクレアにとって、幼年時代の世界であり、旧習にそまつた社会である。鳥はそこから抜け出そうとする自由を求めるエネルギー（リビドー）の象徴であると考えられる。ユングはリビドーについてフロイトのように単なる性的エネルギーではなく、広く生命のエネルギーとしてとらえ

---

16) Ebd., S.88.

17) Ebd., S.89.

18) Ebd., S.91.

ている。そしてリビドーが無意識から意識にのぼるときには象徴の形をとるのである。<sup>19)</sup>

エマヌエル・マイアーによればシンクレアの住んでいた家の門の要石は中世が希求した錬金術の「賢者の石」(Lapis Philosophorum)<sup>20)</sup>である。シンクレアの家が、もとは修道院の所有だったこともこの解釈の妥当性を裏付けていると考えられる。「賢者の石」はダイヤモンドのように「完成した物質」<sup>21)</sup>である。ヤコービの『ユング心理学』の「老賢者」は水晶を手を持っている<sup>22)</sup>し、ユング自身が描いた老賢者「フィレモン」も光る玉のようなものを手に抱えている。<sup>23)</sup>これは単なる石ではなく心の発展の最高目標、すなわち「自己」<sup>24)</sup>(Selbst)を示すものとされている。

マイアーはさらに、シンクレアが描いた鳥の絵の背景の青に着目し、青は思考機能を意味し、鳥は思考が空へ飛翔することを意味していると、解釈している。<sup>25)</sup>

いっぽうジオルカウスキーはバッハオーフェンに依拠して、卵は古代ローマにおける世界の両極——「明るい」極と「暗い」極を象徴し、鳥と卵は本来古代ローマ人の再生のシンボルであったものが、ここではシンクレアの精神的再生の宗教的探求と成長の象徴として使われていると解釈している。<sup>26)</sup>さらに彼は、シンクレアが記憶によってではなく、自由な創造によってこ

---

19) 宮城音弥編『岩波心理学小辞典』岩波書店、1979年、249頁以下参照。

20) Vgl. Emanuel Maier: The Psychology of C.G.Jung in the Works of Hermann Hesse. Diss. New York 1952, S.100.

21) Ebd.

22) ヨランダ・ヤコービ『ユング心理学』池田紘一他訳、日本教文社、1973年、図版5。

23) アニエラ・ヤッフェ編『ユング——そのイメージとことば』氏原寛訳、誠信書房、1995年、67頁。

24) ヨランダ・ヤコービ『ユング心理学』、226頁参照。なお「賢者の石」に関して詳しくはC・G・ユング『心理学と錬金術』I, II, 池田紘一・鎌田道生訳、人文書院、1976年参照。

25) Vgl. Maier, S.100.

26) Vgl. Theodore Ziolkowski: The Novels of Hermann Hesse. A Study in Theme and Structure. Princeton: Princeton University Press 1974 (1965), S.114.

の絵を描いたことを指摘し、その絵が古代の宗教のシンボルと結びついているという事実が、ユングの集合的無意識のプロセスを実際に示していると述べている。<sup>27)</sup>

以上アメリカの研究者が早くからヘッセと深層心理学の関係に着目していたのに対し、ドイツではこの方面での研究は必ずしも盛んではなかったが、最近バウマンが、ユング心理学の視点から『デーミアン』を解釈した論文を発表した。その中で彼は、ユングの『変容の象徴』を引き合いに出し、卵は元型的な母親の象徴であり、近親相姦の禁止が広まったことにより、キリスト教——ユダヤ教文化圏では、神話の中でしばしば英雄が精神的に再生する場所とされていると指摘している。<sup>28)</sup>

このように三者三様にユングの影響を指摘しており、とくに集合的無意識と関連づけているのは興味深い。実際この頃ヘッセが読んだユングの『リビドーの変容と象徴』 („Wandlungen und Symbole der Libido“, 1912. 1952年以降は『変容の象徴』 „Symbole der Wandlung. Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie“ として出版されている) の中にも、エジプトの『死者の書』からの引用として「わたしはかれの卵からかえった尊い鷹<sup>29)</sup>」という一節が見られ、リチャーズもこの箇所を指摘している。<sup>30)</sup> また『心理学と錬金術』 (Psychologie und Alchemie, 1944) には15世紀の写本から採った「哲学者の卵」から頭を出した双頭の鷲の図が掲げられ、「錬金術においては卵は、錬金術師たちが感得した渾沌(カオス)、その中に鎖で縛られて宇宙の魂が閉じ込められている『第一質量』(プリマ・マテリア)である。卵はまるい形をし

---

27) Vgl. Ebd., S.116.

28) Vgl. Günter Baumann: Hermann Hesses „Demian“ im Lichte der Psychologie C.G.Jungs. In: Volker Michels (Hrsg.): Materialien zu Hermann Hesses „Demian“, Zweiter Band (=MII), Frankfurt am Main: Suhrkamp 1997, S.340.

29) C.G.Jung: Wandlungen und Symbole der Libido. Leipzig und Wien: Franz Deuticke 1912, S.250.

30) Vgl. David G.Richards: Integrationssymbole in Hermann Hesses „Demian“. In: MII, S.300f.

た調理鍋によって象徴されたが、この卵の中から驚ないしは不死鳥（フェニックス）が立ち現れる。この驚ないし不死鳥（フェニックス）は、いまや解き放たれた魂であって、結局のところこれはまたもや、かつて自然(Physis)<sup>31)</sup>の中に閉じ込められていたところの、あのアントロポスと一致するのである」という説明が付けられている。

しかしヘッセが鳥のモチーフに関してユングの著書から借用したと単純に考えるのは必ずしも正しいとは言えないであろう。ユングは1916年、フランス語で書いた論文『無意識の構造』(La structure de l'inconscient)の中で初めて「個人的無意識」、「集合的無意識」、「個性化」、「アニマ・アニムス」、「太母」、「ペルソナ」、「自己」などの用語を用いている。おそらくヘッセはこれらについて直接読んだか、ラングから聞いたことであろう。また『リビドーの変容と象徴』にも「太母」が登場する（『変容の象徴』ではこれらにさらに「老人」、「魔女」、「影」、「地母神」などの元型が加わっている）。実際『デーミアン』の登場人物の何人かは、たとえばクロマーが「影」、ベアトリーチェが「アニマ」、エヴァ夫人が「アニマ」ならびに「太母」という具合に元型に還元することが可能である。しかし「鳥」という「元型」は存在しない。先に述べたように『リビドーの変容と象徴』には確かに「卵からかえった尊い鷹」が出てくる。だがそれは、いくつもある象徴の一つの例であって、この書物の中で特に重要な役割を演じているわけではない。というわけで、筆者にとってこのモチーフの出所は長いこと謎であった。ところが『夢日記』を読むと、これがヘッセが実際に見た夢をモデルにしていることが分かり、まさに目から鱗の落ちる思いがしたのである。それでは問題の1917年8月27日の日記を見てみよう。

「最も奇妙な夢はこの最後のものだ。

私は（まだ前の夢とのぼんやりとしたつながりの中で）妻のもとへ非常

---

31) C・G・ユング『心理学と錬金術』I、池田紘一・鎌田道生訳、人文書院、1976年、273頁。



に奇妙な珍しいものを持っていった。円い縁取りのあるレリーフの一種だった。卵から這い出る若い鷺で(羽化する蝶の面影もあった)、鷺の頭は(いやそれどころか時には鷺全体が)本物で生きており、額縁から出ようともがいていた。ひょっとすると鷺はガラスの下にいたのかもしれない。いずれにせよ鉤爪と嘴の先は、はっきりそれと信じられるほど突き出ており、一方他の部分はいくらか人工的で絵のままであった。わたしはまさにこの抜け出る瞬間を妻に見せたいと思い、見るようにときかんに声をかけた。だが彼女は私から三步しか離れていない所に坐っていたのにやって来ず、ただこちらを少し見ただけで何の関心も示さなかった。私は気分を害し、腹を立てた。そしてもう一度声をかけたが、無駄だと分かったので立ち上がり、部屋から出ていった。怒りがこみあげ、悲しくなって、ドアを後ろ手で二度閉めた。私はもう来るまいと腹立ち紛れに考えた。だがそんなことはしないだろうということは分かっていた。私の怒りやこれらすべてのことは、自分でも半分は認識している狂気のせいだということが分かっていた。この憤怒と自己認識、外界への投影と自己の内部に関する知識の入り交じった悲しみに満ちた気分は、まさしく私がほとんど毎日体験している現実と同じなのである。<sup>32)</sup>

状況についてのこれ以上の説明は不要であろう。「鷺」についてヘッセは次のように自己分析している。

「鷺はついこの間偶然至近距離で見た猛禽に由来している。おそらく隼だったろう。私は最近シェーデリンにこの話をし、美しい鳥の頭がどんなに見事で、高貴で、鋭いものだったか語った。夢の中の鷺もまったく同様だった。鷺は美しいエジプトのハイタカの頭を思い起させる。また鳥が半分は生きており、半分は絵であったのは、私たちが子供の頃高価なアルバムで時々見るのを許された、一部が描かれ彩色が施され、一部

---

32) TG, S.84.

に本物の羽がくっつけてあった鳥の絵を思わせる。はっきりとしないのは、鷺が卵から這い出すのか、ただ額縁と絵の中から這い出そうとしているのかということだ<sup>33)</sup>。」

以上がヘッセの自己分析である。夢の素材は多くが日常生活の残滓なので、鳥はヘッセ自身が言っているように最近見た雉の姿がもとになっているのであろう。しかしそれが、幼年時代にアルバムで見た鳥の絵だけでなく、エジプトのハイタカの頭を思い起させる（デーミアンの説明では、シンクレアの家の要石の鳥もハイタカである）という所から、この鳥は単にヘッセの個人的な記憶だけでなく、集合的無意識とも結びついていると考えられなくもない。だがヘッセは日記のこの部分では『リビドーの変容と象徴』については何も言及していない。もちろん本で読んだ、卵からかえった鷹の記憶が、無意識の中に入りこみ、この時点では、それとはっきり意識されずに夢の中に現れたということは、十分に考えられることではあるが、いずれにせよ、このモチーフは、ヘッセが実際に見た夢の中から採られたものである。ヘッセは卵から這い出ようとする鳥の姿に、苦渋に満ちた現実を越えていこうという自分の姿を無意識の内に重ねようと試みたのであろう。

鳥が精神の飛翔を表すというのは誰にでもすぐに理解できることであるが、ヘッセは特にこのモチーフが気に入っていたようである。父の墓碑銘に「縄はちぎれた。鳥は自由だ。」という詩句が書かれていたことについては先に述べたが、父の臨終の様子を描いた『思い出に』（„Zum Gedächtnis“）の中で、父の死に方を逃れた野鳥のようだと言っている。

「私の机の上には手紙が置いてあり、その上に電報が置いてあった。私は読んで微笑まずにはいられなかった。『本当にあつという間に永眠しました』と書いてあった。これはよい、やさしい言い方だ。あの世に行くのにぴったりだ。まったく父らしいやり方だ。私は心の底からそう思い、

---

33) Ebd., S.84f.

父が我々の誰にも気付かれず騒がれずに逃げ出すのに成功したのを、共に小さな勝利のように感じた。鳥のように、捕えられた野鳥が、窓が開いていて、誰もいない部屋にいるときのように。<sup>34)</sup>」

逃げていく鳥というモチーフは初期の作品、例えば『少年時代から』(Aus Kinderzeiten, 1904) にも見られる。

屋根屋の鷹が逃げ出す騒ぎがあった。切られていた翼が伸びたので、鎖をすり切って飛び出したのだった。林檎の木に留まっている鷹を、大人たちは捕まえようとした。一人が梯子を掛け、手を伸ばした時、鷹はゆっくりと、誇らしげに大きな弧を描いて、空に消えていった。友人のブロージーは喜んで叫んだ。「飛べ、飛べ、さあまたお前は自由になれたんだ。<sup>35)</sup>」

ここでも鳥は猛禽類の鷹である。ブロージーは病気でまもなく死ぬのであるが、飛んでいく鷹は彼にとってまさしく自由の象徴なのである。

鳥のモチーフが重要な役割を担っている作品として忘れてはならないのは『デーミアン』から約一年後に書かれ、『デーミアン』と同様匿名で出版された『ツァラトゥストラの再来』(Zarathustras Wiederkehr, 1919) である。その最後の場面でツァラトゥストラは青年たちに語りかける。

「その名がなんであろうと、君たちは演説家や教師から言われることに耳をかすな。君たちのめいめいが耳をかす必要があるのは、ただひとつ、自分の唯一の独自の鳥だけである。

このことをわたしは別れに際して君たちに言う。その鳥に耳をかせ！ 君たち自身の中から来る声に耳をかせ！ その声が沈黙していたら、何かゆがんでいる、何か調子が狂っている、君たちが道を誤っている、のだということを知れ。

だが、君たちの鳥が歌い、語るならば、——その時は、それに従え、その声のあらゆる誘いに従え、どんなに冷たい孤独の中へでも、どんな

---

34) GW10, S.123f.

35) GW2, S.221.

に暗い運命の中へでも<sup>36)</sup>！」

ヘッセは二十歳の時ニーチェの『ツァラトゥストラはこう語った』を読み大きな衝撃を受け、その後バーゼルに移ってからはニーチェを耽読した。ニーチェの名は『ペーター・カーメンチント』、『乾草の月』、『湯治客』など、数多くの作品に登場する。もちろん『デーミアン』でも重要な役割があたえられ、『夢日記』にもたびたび出てくる。そんなヘッセにとっては『ツァラトゥストラ』はいわば自家薬籠中のものであったことだろう。『ツァラトゥストラの再来』は、内容よりはむしろ文体でニーチェを模倣していると言われている。ニーチェの『ツァラトゥストラはこう語った』でも鷲が、太陽のもとで最も誇り高い動物として登場するが、超人の象徴として使われる動物は鷲ではなく獅子である。ヘッセの『ツァラトゥストラの再来』では獅子は登場しない。ここで登場する唯一の動物は鳥である。しかしその鳥は外界にいるのではない。めいめいの中に住んでいるのである。個々人の運命の呼び声、これが鳥の声なのである。

『デーミアン』でも終わりの方で再び鳥が登場するが、これは現実の鳥ではなく、シンクレーアの心の像であった。

「風が黄色いものと青い色のものから数秒間に一つの形を作った。それは巨大な鳥で、青い色の混乱から脱すると、大きく羽ばたきして空の中に消えてしまった。すると、あらしが聞えるようになった。雨はヒョウをまじえてぱらぱらと落ちた。短い、異様に恐ろしく響く雷鳴が、たたかれた山河の上にはためいた。すぐそのあとでまた日がさした。茶色<sup>37)</sup>の森の向うの近い山々にあお白い雪がにぶく夢のように光っていた。」

デーミアンとの対話の中でシンクレーアはこの鳥が夢で見たハイタカだったことを確認する。この鳥を見たのはけっして偶然ではないと、デーミアンと言う。シンクレーアは何だか良く分からないものの、この鳥の中に運命の

36) GW10, S.496f. 訳は高橋健二氏（角川文庫、1969年）によった。

37) GW5, S.151.

歩みを感じる。やがてそれは戦争だと分かる。新しいものが生まれるためには古いものが崩壊しなければならない。シンクレアは運命の呼び声に従い、戦場へと赴くのである。

#### 4. 「アブラクサス」とユングとの出会い

さて、鳥が目指して飛んでいくアブラクサスとはどんな神であろうか。授業中にシンクレアは教師から次のような説明を聞く。

「人々はこの名をギリシャの呪文と結びつけて呼び、今日なお野蛮な民族が持っているような魔術師の悪魔の名だと思っているものが多い。しかしアブラクサスはずっと多くのものを意味しているように思われる。われわれはこの名をたとえば、神的なものと悪魔的なものとを結合する象徴的な使命を持つ一つの神性の名と考えることができる。<sup>38)</sup>」

ピストーリウスはシンクレアによりはっきりと、「ぼくたちの神はアブラクサスといい、神であり悪魔であり、明るい世界と暗い世界を内に蔵している<sup>39)</sup>」と言う。ピストーリウスのモデルは先にも述べたとおりラング博士であるが、彼はグノーシス主義に造詣が深く、『デーミアン』に出てくるカイン派についての知識も、ヘッセは彼から得たのであろうとバウマンは推測している<sup>40)</sup>。

アブラクサスについてはユングが1916年に私家版として出版した『死者への七つの語らい』の中で触れられているが、ヘッセがユングからこの小冊子を受け取るのは1919年12月のことである。すなわち『デーミアン』を読んだユングが、匿名であったにもかかわらずこの本の著者がヘッセだということを見抜き、感謝の言葉とともにこの小冊子を贈ったのである。このようなわ

---

38) GW5, S.92.

39) GW5, S.109.

40) MII, S.348f.

けで従来は、アブラクサスについては、ヘッセはラングから教わったのであろうという見方が一般的であった。ところが1993年に出た „Materialien zu Hermann Hesses ‚Demian‘. Erster Band“ の中で1917年8月27日から9月12日までの日記の一部が公開された際、9月8日の記述から、9月7日にヘッセとユングが会見したことが明らかになったので、この時アブラクサスについての話も出たのではないかという推測がされるようになった。ところが今回あらためて『夢日記』の全貌が明らかにされると、ヘッセが9月10日に『死者への七つの語らい』そのものを読んでいたことが判明した。

「昨晚帰宅中『死者への七つの語らい』を読み強い印象を受けた。けれども無意識の純粋な表出とは思えなかった。それにしてはあまりにも明解すぎ、体系的すぎるように思えたのである。いずれにせよ多くのことが語られていて、特に個性化の原理の表現は十二分に考え抜かれており、<sup>41)</sup> 適切である。他のことは良く分からなかった。」

「帰宅中」とはおそらくルツェルンのラングのもとからベルンに帰る列車の中のことだと考えられる。多分ヘッセはユングがラングに贈った私家版を借りたのであろう。ヘッセが日記で触れている「個性化の原理」(principium individuationis) とは、無限にして不滅なる根源的存在である「プレロマ」(Pleroma) に対する現実存在「クレアツール」(Creatur) の特性であり、区別することをその本質としている。もし我々が区別しなければプレロマの他の性質である非区別性の中に落ち込み、無の中に溶け去ってしまい、クレアツールであることをやめてしまうことになる。それゆえ「クレアツールの自然の志向は区別すること、<sup>42)</sup> 原初的で危険な一様性への戦い、へと向けられる」のである。

アブラクサスについては次のように述べられている。

---

41) TG, S.100.

42) Aniela Jaffé (Hrsg.): Erinnerungen, Träume, Gedanken von C.G.Jung. Zürich und Düsseldorf: Walter <sup>10</sup>1997, S.390. 訳は『ユング自伝2』(ヤッフェ編, 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳, みすず書房, 1973年) による。



「アブラクサスは作用であり、それに対抗するものは、非現実的なもの以外何ものもない。従って、その作用する性質は自由に広がっていく。非現実的なものは存在せず、抵抗しない。アブラクサスは太陽の上に存在し、悪魔の上にも存在する。それはありえないようでありうるものであり、はたらかないようでありはたらくものである。もしプレロマが一つの存在であるとするならば、アブラクサスはその顕われであるといえよう。

それははたらきそのものであるが、特定のはたらきではなく、はたらき全般なのである。(中略)アブラクサスは認識しがたい神である。その力は、人間がそれを見ることができないので最大である。人間は太陽から最高の善を、悪魔からは最低の悪を経験するが、アブラクサスからはあらゆる点で不確定な『いのち』、善と悪との母なるものを経験する。(中略)アブラクサスは太陽であると同時に、虚空の吸い込み口であり、小さくする者の、切り刻む者の、悪魔の吸い込み口である。(中略)アブラクサスは同一の言葉、同一の行為の中に、真と偽、善と悪、光と闇を生み出す。従ってアブラクサスは恐るべきである。<sup>43)</sup>

善と悪の両極性を包含するアブラクサスはヘッセが『カラマーゾフの兄弟——ヨーロッパの没落』(Die Brüder Karamasoff oder Der Untergang Europas, 1919)で言及した最古の神デミウルク(デーミウルゴス)を思わせる。

「同時に悪魔であるところの神は、最古の造物主デミウルクである。それは、起源より前に存在していた神である。唯一のものである彼は、いろいろな対立の彼岸に立ち、昼も夜も、善も悪も知らない。彼は虚無であり、いっさいである。彼はわれわれには認識できない。われわれはみな、対立によってのみ認識することができるからである。われわれは個

---

43) Ebd, S.392f.訳は『ユング自伝2』(ヤッフェ編, 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳, みすず書房, 1973年)を参考にしたが、一部筆者の手を加えた。

人であり、昼と夜、温暖と寒冷とに束縛されており、神と悪魔とを必要とする。対立の彼岸に、虚無にしていっさいなるものの中に生きているのは、ただ造物主デミウルク、善も悪も知らない一切者の神だけである。<sup>44)</sup>」プラトンやグノーシス主義で世界形成者とされるデーミウルゴスは、また『エキゾチックな芸術』(Exotische Kunst, 1922) にも登場する。

「このような没落の気分が支配している時代には常に奇妙な新たな神が現われてくる。それはむしろ悪魔のような外見をしている。今まで理性的とされていたものが意味を失い、今まで狂気とされていたものが積極的に評価され、希望に満ちたものとなる。すべての境界が曖昧になり、すべての評価が不可能となるかのように見える。デミウルクがやってくる。それは善でも悪でもなく、神でも悪魔でもなく、ただ創造する者であり、破壊する者であり、盲目的な根源的な力である。この一見したところ没落する瞬間は、一つ一つが感動的な体験、奇蹟、改心の瞬間となる。それはパラドックスを体験する瞬間、煌めく瞬間であり、そこでは極が触れ合い、境界が消え、規範が溶けてなくなるのである。その際場合によってはモラルや秩序が墮落することもあるが、その過程自体は考えうるもっとも生き生きしたものである。<sup>45)</sup>」

ヘッセによるデミウルクの説明は、ユングやヘッセ自身によるアブラクサスの説明よりも、より具体的で生き生きしている。ヘッセが日記の中で「あまりにも明解すぎ、体系的すぎるように思えた」と書いているように、ユングのアブラクサスはより抽象的、思弁的である。『死者への七つの語らい』で知識として得たアブラクサスが戦中、戦後のさまざまな経験の中で熟し、発酵して形となったものがデミウルクであると考えても差し支えないであろう。またここには学者(思索家)と芸術家(作家)の表現形態の相違も見て取

44) Hermann Hesse: Gesammelte Schriften (=GS), Frankfurt am Main: Suhrkamp 1957, Bd.7, S.165. 訳は高橋健二氏(角川文庫, 1969年)によった。

45) GS7, S.271.

れるように思われる。

なおアブラクサスとは2世紀初頭に活躍したグノーシス派のバジリデスが用いた言葉でABRAXASの七文字が七曜日を表し、それぞれの文字の持っている数値(A=1, B=2, R=100, A=1, X=60, A=1, S=200)の合計が365という一年の日数を表すことから、至高の存在を表す靈的位階名とされた。またアブラクサスを刻んだカメオには頭が鶏で、体が人間、足が蛇という生物の絵が描かれているが、鶏は昇る太陽を、蛇は大地を象徴し、これによりアブラクサスは天体と大地、光と闇の対立を結合していると説明<sup>46)</sup>されている。

さて、先に述べたように、ヘッセとユングが初めて顔を合わせたのは今まで考えられたよりも早く、1917年9月7日のことであることが判明した。仕事でベルンまで来ていたユングがヘッセに電話をし、一緒にユングの泊まっていたホテルで夕食を取ったのである。おそらくラングの仲介により、この会見が実現したのであろう。当時ユングは42歳、ヘッセは40歳、それぞれの世界で押しも押されもしない存在になっていた。二人の対話は大変興味深いものだったと思われる。ヘッセはこの晩の様子を次のように記している。

「彼についての私の評価は、この最初の会見の間何度も変わった。彼の強い自意識はある時は私の気に入る、ある時は嫌悪感を催させたが、全体としては大変良い印象が残った。

この夜彼のことを色々と夢に見たようだが、もう何も覚えていない。ただ一つだけぼんやりとかすかにまだ頭に残っていることがある。彼は(昨日の話の中と同じように)自分の言ったことを証明するために、夢(証明材料)を作り出そうとした。すると夢は本当にやってきて、何か白いもの(不透明の白い塗料で描かれた絵、素描のようなもの)の形になった。

私たちは昨晚さまざまな話をした。グノーシス主義の話や中国の話も

---

46) MI, S.24f.

話題に上った。彼の話聞くのは大変有益で、面白かった。特に興味深かったのは、だんだんと話が深まっていったことだ。(初めのうちは彼は私のことをほとんど何も知らなかった。特に私が精神分析を受けているのを知らなかった。)私は彼にとりわけ分析を以前にすでに二回受けていること、一度はケラー牧師から、その後で(その従兄の)ベルンのユング博士<sup>47)</sup>から受けたこと、そして大きな関心を持っていたにもかかわらず、私が二人を充分信頼していなかったため、うまくいかなかったことを話した。ユング博士は笑って言った。『そう、それはまったく正しい感じだったのです。二人とも、分析は自分にとって教えたり、研究したりするだけで、体験することのない知的な関心事にすぎないと思っている種類の人たちです。』ラング博士<sup>48)</sup>については、自分の問題を実際に体験する人間だと力を込めて語った。』

「中国の話」(das Chinesische)とはおそらく、古代中国哲学の話であろう。1910年前後からリヒャルト・ヴィルヘルムを中心に『老子』や『論語』、『易経』などの多くの翻訳がなされ、ドイツ語圏で盛んに読まれた。ヘッセは1909年に『論語』の、1910年には『老子』の書評を書いている。ユングが易<sup>49)</sup>に強い興味を持ち、自分でも試みていたのはよく知られるところである。な<sup>50)</sup>おりヒャルト・ヴィルヘルムとはユングは1923年から、ヘッセは1926年から交流がある。

「グノーシス主義の話」(das Gnostische)も話題に上ったと書かれているが、アブラクサスの話までしたかどうかは明らかにされていない。ヘッセの日記やユングがヘッセに宛てた手紙から判断するとおそらくそこまでは話さなかったと考えられる。ここでユングが『死者への七つの語らい』を贈っ

47) Felix Jung (1892-1969), 医学博士, 精神科医。

48) TG, S.94.

49) Vgl. GW12, S.25ff.

50) Vgl. Aniela Jaffé (Hrsg.): Erinnerungen, Träume, Gedanken von C.G.Jung. Zürich und Düsseldorf: Walter 1997, S.380ff.

た時に書いた1919年12月3日付けの手紙を見ておこう。

「あなたの素晴らしい、真実の御著書『デーミアン』に対し、本当に心より御礼申し上げなければなりません。匿名にされているのを破るのは、不躰で厚かましいこととは存じますが、御著書を拝見しました時に、これはなんらかの形でルツェルンを経由したものに違いないという気がいたしたのです。(中略)あなたの御著書は、小さなクナウアーがシンクレアーに交際を迫ったように、今日の人間が行なっている事実の隠蔽と救いようのない頑迷さが、またもや私のもとにしつこく押し掛けてきた時に、私のもとにやって来ました。ですから御著書は私にとって、嵐の夜の灯台の灯りのような働きをしたのです。

良い本というものには正しい人生と同様、終わりがなければなりません。御著書は考え得るかぎりでもっと素晴らしい終わり方をしています。それというのも、前に起こったすべてのことが本当に終わり、そして、そこからこの本が始まったすべてのことがまた再び始まる場所、つまり新しい人間の誕生と目覚めで終わっているからです。(中略)

デーミアンに関してはさらにもう一つささやかな秘密をお話することができます。あなたはその証人になったわけですが、その意味は読者にも、そしてひょっとしたらあなた御自身にも知らされてはいないのではないのでしょうか。私はデーミアンともう長いこと交友関係を結んでおり、最近彼が特別の機会に——絶対に秘密を守るという約束で——秘蹟を授けてくれたので、そのことについてあなたに充分満足のいく説明をすることもできます。いずれにせよあなたは年が経つうちに不思議なやり方でこのほのめかしが確認されているのを見るでしょう。<sup>51)</sup>」

このささやかな秘密というのが、おそらくアブラクサスのことを指しているのだと思われる。ユングがヘッセと直接アブラクサスについて話したので

---

51) C.G.Jung: Briefe, Dritter Band. Hrsg. von Aniela Jaffé. Olten und Freiburg: Walter 1973, S.384f.

あれば、「なんらかの形でルツェルンを経由した」とか「もう一つささやかな秘密」というような婉曲的な言い方をせず、もっと直截的な表現を用いたのではないかと考えられる。残念ながら、現在の所、この問題についてこれ以上深く立ち入るための資料は見当たらない。

ユングとの会見はヘッセに強い印象を与えたようで、その後何度もユングは『夢日記』に登場する。特に注目されるのは、ヘッセがユングについて述べる際 „Angepaßtheit“（順応性、適応性）や „angepaßt“（順応した、適応した）という語を多用していることである。例えば1917年9月11日の日記にはスイス将校の軍服を着た男と一緒にいる夢を見たことが記されているが、その分析のなかに次のような箇所が見られる。

「制服については、医者<sup>52)</sup>の制服を着ているユング博士が思い浮かんだが、これは適応性（Angepaßtheit）の象徴である。夢の中で彼は制服をきちんと着ていたが、私は自分の制服を、ただ外見を取り繕うために借りて着てただけで、実際には将校ではなかった。彼が私より勝っているという感情を、この夢の中でもユングに対して持った。私は順応して（angepaßt）健康であると自分が感じている人々に対して、非常にしばしばこの感情を持つのである。」

また同日の日記の中にさらに次のような記述がある。

「ユング博士についてよく考えてみるともう一つ思いついたことがある。彼は少しばかりブレーメンのシュトイデル牧師を思わせた。もちろんシュトイデル牧師は決して神秘主義者ではない。シュトイデルは自由な教区から選ばれたドイツのごくわずかな自由な聖職者の一人で、一元論者であり自然科学者で、ダーウィンやベルシェを説教に使っている。以前ブレーメンで彼のもとに二、三日滞在した時、時には粗野とも思える男らしい明け透けな様子や、私には不当にもしばしばシニカルとも思える

---

52) TG, S.99.



健康な順応性 (Angepaßtheit) によって強い印象を与えた。彼の言葉の一つが心に残っている。私は彼に自分の妻がはるかに年上だと語った。そうすると彼はざっくばらんに白状するのだった。『そうですか。あなたもこの愚行を犯したのですね?』そして、自分が若くて性的な能力があるのに、年上の妻を持つのは愚かなことだと、付け加えた。この言葉を私は忘れることができず、自分の結婚について非難めいたことを言ったことに対し、彼が私を支持してくれたことで、私は後にしばしば苦しんだ。このシュトイデル牧師をユングはほんの少し思い出させた。その風采と、自意識と男らしさと高度な順応性 (Angepaßtheit) が備わったその態度において。<sup>53)</sup>」

ヘッセは自分をアウトサイダーと感じており、社会や他の人間とうまく付き合っていける人間について、一方で批判的に見ながらも一種の羨望を禁じ得ないところがある。特に年上の同性に対してこの感情が顕著に見られる。『ペーター・カーメンチント』における主人公のリヒャルトに対する愛情もこの一種である。ユングの強い自意識に対してヘッセが抱いた半ば気に入、半ば嫌悪感をもつというアンビヴァレントな感情もこのコンプレックスが根底にあると考えられるが、それをヘッセが自分に容赦なく分析しているところにも、『夢日記』を付けるにあたったの、彼の真摯な態度が窺える。

## 5. 「デーミアン」の名の由来

作品の標題にもなっている „Demian“ の由来についてはシュミットのよ<sup>54)</sup>うに「jemandもしくは(n) iemandの文字を入れ換えたもの」という説もあるが、一般に広く認められているのはフーゴー・バルの説である。ヘッセの

53) TG, S.100ff.

54) Hans Rudolf Schmid: Hermann Hesse. Frauenfeld, Leipzig: Huber 1928, S.144. Zit. n. Martin Pfeifer: Hesse-Kommentar zu sämtlichen Werken. München: Winkler 1980, S.135.

親しい友人であったバルの著書『ヘルマン・ヘッセ』は未公開の手紙などの資料をヘッセから直接借りて書いたものであり、ヘッセも高く評価していたものであるため、ヘッセ研究における一つの規範となっていた。そこには次のように書かれている。

「『デーミアン』の成立をごく間近で共に体験した人の話によると、この名は詩人の当時の鬼神学の研究に由来し、デーモン＝デーミアンは daemoniacus（悪魔の）という語に共通の根を持っているとのことである。<sup>55)</sup>」

ベルンハルト・ツェラーはこれに対し、「デーミアン」という名はヘッセが夢の中で見つけたものだと書いて<sup>56)</sup>いる。ツェラーはヘッセの原稿を保管しているマールバッハにある「ドイツ文学資料館」(Deutsches Literaturarchiv)の館長であったので、おそらく『夢日記』を読む機会もあったと思われるが、著書ではこれ以上この件については言及していないので、この夢の詳細については分からなかった。それが今回の『夢日記』の公刊に伴い、初めてその内容が明らかになったのである。この一点だけでも、この日記を出版した意義はあるといえよう。

さて、それでは1917年9月12日の日記を見てみよう。夢の中でヘッセは夜のベルンを思わせる古い小さな町の小路に迷いこむ。

「今度は、今までその中を走り回っていた、魔法にかかった地区から脱出して、本当に家路についたかのように思えた。そうするとまた闇の中から、おそらく酩酊した、足の弱そうな人影が現われてきた。こいつなら簡単に倒せるだろうと考えて、まず杖を使い、それから取っ組み合った。ところがその男は大変強く、私を押さえ付けてしまった。ついには取っ組み合っている間に彼は金を奪い、礼に貰っていくぜとうそぶいた。

---

55) Hugo Ball: Hermann Hesse. Frankfurt am Main: Suhrkamp 1972, S.64.

56) Vgl. Bernhard Zeller: Hermann Hesse. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt <sup>11</sup>1973 (1963), S.78.

ヴェストのポケットに入れておいた硬貨二三枚だと思っていたが、取られたのは所持金全部で、明らかに多くの額だった。だんだんと不気味で危険に思えてきたその男は『デーミアン』という名だった。今度はすべてが暗くなった。近くにいる人が助けてくれるだろうと期待して、また彼と取っ組み合いをしたが負けてしまったらしい。だがすべてははっきりしない。その後私はデーミアンと（彼は今度は私の級友に少し似ていた）一室に閉じこめられていた（おそらく他にも人がいたと思う）。私はこの部屋から出ることができずデーミアンと一緒にいなければならないようだった。デーミアンは横になっていた。（その後目が覚めて分かったのだが、実際は私が毛布の中に頭をつっこみ、暑さと酸素不足に苦しんでいたのであった。）デーミアンは今度は病気のように、小さな傷、眼と鼻の間の鼻根の辺りにある怪我かかさぶたを示した。小さな傷でしかないように見えたが、彼がそれを押し、指の爪で開けると、汗疹か何かのようだと思えた。というのは膿がいくらか出ていたからである。それから背筋が寒くなった。というのもデーミアンが指で皮膚と瘡蓋を持ち上げると、その下には眼と鼻の辺りがすべて病気になっていて気味悪く、腐ったように壊疽を起し、化膿した汁をいっぱい出していたからであった。彼は大きな痛みにうめき声をあげた。夢の残りは全て忘れてしまった<sup>57)</sup>。」

この夢の分析でヘッセはデーミアンについて次のように述べている。

「デーミアンについて思いついたこと。ダーミアーン (Damian) の変形。だが音が変わったことにより『デーモン』 (Dämon) を強く想起させる。またいくらかデミウルク (Demiurg) を思わせる。実在する『ダーミアーン』という名も私にとってはいつも何か奇妙な、少し不気味なものがあり、カトリック的なもの、暗いロマン主義のようなものを思い起

---

57) TG, S.103.

させた。取っ組み合いは不気味で、男は非常に強く、敗北感是不愉快なものだった。この敗北と金を奪われたことは、はじめは軽く考えていたが、だんだんとこのデーミアンに呪縛される一種の魔力へと発展していった。彼に少しばかり似ている級友は愛らしく、力強い人物で、今日でもなお親しくしている。技師で、どんな点でも頑固で力が強く、非常に才能があり独自の考えと稀な精神的エネルギーを持っている。そして強情で自分の道から逸れることがない。それにもかかわらず彼は変人ではなく適応しており (angepaßt) 健康だった。夢に出てきた人物はもちろんほんのわずか彼のことを思い起さただけで、彼の (大変好感の持てる) 特徴を何も持っていなかった。——眼の傷について思いついたこと。私自身が最近傷を負った。庭の中にある小屋で鋤を踏んだ時、鋤が顔にはじけて左眼の中央に当たり、眼鏡のレンズが壊れた。大変痛く、痛みで閉じた眼からは血がしたたり落ちた。一、二分間、眼が見えなくなったと思ったほどだった。それから大したことがないと分かった。眼の下に大きな青い痣ができ、上と下の目蓋のなかに小さな破片が刺さり、鼻骨 (以前涙腺の炎症によるひどい痛みで知っている辺り) が痛かった。二週間以上も前のことだった。ほとんど何も感じなかったが、この数日触れてみると鼻の上の辺りにデーミアンの傷を思わせる、かすかな擦り傷もしくは隆起した部分があるのが分かった。夢の中で恐ろしかったのは、小さいと思った傷が実際は大きいと分かった瞬間、かさぶたの下に腐爛を見た瞬間だった。恐ろしく吐き気がして、ぞっとした。このような事柄に対して私はいつも軽い吐き気を催すのだったが、もちろん特異体質というわけではなかった。血ならば、必要とあれば見ることもできたし、実際子供の頃動物が屠殺されるのをしばしば目にした。しかし膿や腫瘍といった類のもの、さらには病院や手術などに対しては恐れを感じた。時とともにこういったことに関して知識を深め、より落ち着いて眺めることを学んだとはいえ、今なお恐れを感じるのである。若い時は

病院というのは考えただけでも身の毛がよだつものだった。病人に対する哀れみというのも受け入れられなかった。病気は私にとって吐き気をする汚らしいもので、そんなことについては何も知りたくなかった。ニーチェによって早い時期に知った、キリスト教と哀れみに対する拒否もこのことと関連していた。トルストイは不快だった。かなり後になってようやく哀れみとキリスト教への一種の回帰がなされたのであった。<sup>58)</sup>

子供の頃は誰でも美的な本能のほうが道徳や倫理よりも発達しているものであり、膿や腫瘍といった類のものに対しては感覚的な嫌悪感を抱くものである。感受性の強かった子供であったヘッセは特にそれが強かったであろう。宣教師の家に生まれた彼は、特に父の下で、病人には同情しなくてはならない、汚いものを嫌がってはならないと厳格に教育されたに違いない。それに対する反発もあって、病気や手術、さらには病院に対する嫌悪感が、キリスト教に対する拒否と結びついたのであろう。

夢の分析の中でヘッセが「デーミアン」の名がデーモンだけでなくデミウルクを想起させると言っているのは注目に値する。前章でも見てきたように、アブラクサスと多くの共通点をもつデミウルクは、理性を越えた根源的な力であり、まさにこの意味でデーモンなのである。

また夢の分析の中でヘッセがデーミアンに似た級友に対し「順応して(angepaßt)健康である」というユングに対してと同じ形容詞を用いているのも注目される。ユングに会ったのが1917年9月7日、ユングの夢を見たのが9月11日、デーミアンの夢を見たのが翌12日である。ユングという人物の与えた印象はやはり強かったのであろう。ピストーリウスのモデルがラング博士であるというような十全な意味ではモデルとは言えないかもしれないが、単にアブラクサスとの関連だけでなく、デーミアンの少なくともある一部は(ヘッセがあるいは無意識に行なったにせよ)、ユングがモデルになったと考

---

58) TG, S.104f.

えても差し障りがないのではないか。

この夢はまた、デーミアンと知り合った頃シンクレアが見た夢を思い起させる。

「私は——いつも夢を見る傾向の強い人間だった——現実の中でよりもより多く夢の中に生きていた。その幻のために私は力と生気とを失っていった。とりわけ、クローマーが私をむごいめに会わせ、わたしにづばを吐きかけたり、私の胸にひざを押しつけたりする夢をたびたび見た。もっとひどいことには彼が重い犯罪に私を誘う——誘うのではなくて、むしろ彼の強い威力によってむぞうさに強制する夢を見た。これらの夢の中でいちばん恐ろしかったのは、私の父にたいする殺害の夢だった。それからさめたとき、私はなかば精神錯乱に陥っていた。その夢では、クローマーがナイフをとぎ、私の手に握らした。私たちは並木道の本の下に立って、だれかを待ち伏せていた。だれを待ち伏せているのか私は知らなかった。だが、だれかがやってき、クローマーが私の腕を押して、刺し殺さねばならないのはあの男だと教えたとき、見れば、それは私の父だった。そこで私は目をさました。

こういうことに関係して私はカインとアベルのことはよく考えたが、デーミアンのことはほとんどもう考えなかった。その後彼が私にまたはじめて近づいてきたのは、ふしぎなことに、やはり夢の中だった。私はまたいじめられ、暴力を加えられる夢を見たが、私の胸にひざをつけているのは、こんどはクローマーではなく、デーミアンだった。そして——これはまったく新しいことで、私に深い印象を与えたのだが、クローマーから苦悩と反抗のもとに受けたことをすべて、私はデーミアンからは、不安と同様に快感を含む感情をもって好んで受けたのだった。この夢を私は二度見た。それからまたクローマーが代わって現われた。<sup>59)</sup>」

---

59) GW5, S.35f.



この夢には父親殺しの場面が登場するが、父親に代表される「明るい世界」に対し「暗い世界」が承認を迫っていると解釈される。これはシンクレア  
の成長——個性化の過程——の上では欠くことのできないステップである。  
それは先に述べたように、宣教師の家に生まれたヘッセにとっては偏狭なピ  
エティズムからの解放を意味していた。この部分はひょっとするとヘッセの  
純粋な創作かもしれないが、その他の部分はヘッセが実際に見た夢を下敷き  
にしていると考えられる。

## 6.『デーミアン』に対する自己評価

さて最後に、『デーミアン』執筆中に書かれた最後の『夢日記』を見てみよ  
う。

「私は『書籍商新刊案内』で私の新刊書に関する出版業者の広告を読ん  
だ。書評や推薦文の代わりに、ある書籍商が出版業者に宛てて書いた、  
私の本に関する手紙が印刷されていた。とくにその中で書かれていたの  
は、いくつかの点が最初はほとんど粗野に思えたのだが、完全にそれら  
と和解することができたので、この本は大いに薦められるということだ  
った。広告の終わりには通例に従い、出版業者が本を書籍商に納入す  
る際の価格が表示されており、10-100-1000という数になっていた。後で  
自分自身が書籍商になり店で自分の本を売り、その書名を帳簿に付けよ  
うとしていた。最初はカーメンチントと書こうとしたが、それからヘッ  
セとだけ書いて、書名は書かなかった。私の意図は、その本で儲けた金  
を自分のために取っておくこと<sup>60)</sup>だった。」

この夢についてヘッセは次のように分析している。

「[この夢は]かなり長い休止期間の後で昨晚また取り掛かった、書きか

---

60) TG, S.122.

けの原稿とはっきりと関係がある。私はまだ先がどうなるか本当は分か  
っていなかったが、とにかく次の章へと繋ぐ数行を書いた。それは多く  
の人にとってうまくいかない少年時代の終わりと幼児性の解消を（一般  
的、心理学的に）扱っている。手紙という形式云々は実情に即している。  
新刊案内は良心的な書籍商なら誰でも毎日読んでいる、欠くことのでき  
ない専門紙である。書籍商が新刊書について論じた手紙が（宣伝として）  
広告に印刷されるというのは過去に時折りあったことだ。手紙の書き手  
が本の数箇所をほとんど粗野だと感じたことは大変はっきりしている。  
（以前私の書物を満たしていた）美しい昔に物悲しげに牧歌的に留まって  
いるのと比較して、仮借ない心理学がまったく非情な気持ちにさせるの  
を、私自身が昨日感じたのだった。書籍商が同じように感じたのは、私  
が正しかったということを示している。全体は私の新たな仕事と分析の  
正当化だ。だが詳しい記載、特に本の書名や内容、価格、出版社などに  
ついての記載が欠けている。（中略）書名などが不明なのは、私がこの点  
に関しては自分でもはっきり分かっていないという、現在の状態と一致  
している。いずれにせよこの夢は、この本が完成し出版されるようにと  
いう願いを表している。このことは原稿に対する私の関心と一致してい  
る。この数日間私は本当に惨めな状態で（今もそうだが）、しばしばこの  
新しい作品に対して大きな憧れを抱き、本当に完成させることができる  
かということを考えた。昨日は作品のプランがまだまったく先に進んで  
いなかったのだが、ただ心を静めるため、そして作品との接点を失わな  
いために、少なくとも二、三行書く必要があった。少年時代を終えなけ  
ればならないということに関する『ほとんど粗野』な言葉はユングの『変  
容』<sup>61)</sup>と結びついている。つまりそれらの言葉はそこで引用されている思  
索家の孤独についてのニーチェ<sup>62)</sup>の言葉からも影響を受けているのである。

61) C.G.Jung: Wandlungen und Symbole der Libido. Leipzig und Wien: Franz  
Deuticke 1912.

62) おそらく『人間的な、あまりに人間的な』の序を指しているであろう。

まさに最も畏敬の念に満ちた、最も従順な、最も誠実な者は、権威の崩壊が起こった後は、改革者として最も情け容赦のない態度を取らざるをえないのである。このつながりは、以前若い時分にニーチェを最初に読んだ時すでに非常に深く、まるで自分のことを念頭において言われたかのように心を打ち、ニーチェの精神的——道徳的構造が私のそれに非常に近いもののように思われたのだった。夢の最後の部分については、盗みという昔の問題しか思いつかない。盗んだり自慰をしたりすること、それはニーチェを読んだり、自ら詩作したりする時の高貴な気分<sup>63)</sup>にふさわしくないということは二十一歳の若者の時にしばしば強く感じた。」

「少年時代の終わり」という文脈から判断して、この日記は『デーミアン』の第三章を書いていた頃に書かれたものと推定できる。全体の三分の一ができた辺りで、まだ「鳥」や「アプラクサス」は登場してこない。ヘッセ自身が分析の中で述べているように、先のことはまだはっきりしなかったのであろう。ただ一つはっきりしていたのは、この作品が過去の作品とはまったく別のものになるであろうということである。ロマンチックなヘッセ、郷土詩人ヘッセからの脱皮である。産みの苦しみを感じながらも、ヘッセ自身の分身とも言える書籍商の手紙の積極的な評価、すなわち無意識による肯定を支えに、筆を一步でも、いや半歩でも先に進めようと懸命になっている姿が窺える。

それまでの自分を克服し、新たな創作の道を踏み出したという点で、『デーミアン』はベートーヴェンの『英雄』にも比肩しうる作品であろう。どちらも、片やナポレオン戦争、片や第一次世界大戦という激動の時代に作られた。ベートーヴェンはこの時期、音楽家の生命である耳の疾患が隠しおおせないのを悟り、『ハイリゲンシュタットの遺書』を書く。ヘッセもこの時期『孤独な夜』といった詩を書き、死への親近感を示している。だが、ベートーヴェ

---

63) TG, 123ff.

ンは耳が聞こえなくなったことで、一層内なる楽の音が聞こえるようになり、ヘッセは深層心理学に親しむことによって、自らの、そして集団としての人間の内なる声を聞くことができるようになった。困難を克服し、それを新たな創作の源とした二つの作品、ここに見られるのは、コリン・ウィルソンの言葉を借りれば「芸術家が精神的な激動期を生きぬく奇蹟的な力<sup>64)</sup>」である。『デーミアン』と『英雄』、これらの作品を転機として二人の芸術家は自己を見つめなおし、再生の道を模索した。その意味でこれらは両者にとって記念碑な作品といえるであろう。

もしもベートーヴェンが『英雄』を作曲せず、ヘッセが『デーミアン』を書かなければどうなっていたであろうか。おそらくそれ以降の作品も、それ以前の作品と同じように過去の模倣にとどまっていたであろう。それぞれ愛すべき芸術家として、その時代の人々に愛されたかもしれないが、時代を越えて訴えかける存在にはならなかったに違いない。そうした意味ではこれらの作品はただ単に両者にとって記念碑な作品であるというだけにとどまらず、人類にとっての福音とも言えるのではないだろうか。

ヘッセが『デーミアン』執筆に専念していた証のように『夢日記』はこの1917年9月29日の記述を以て一時中断する。10月末には『デーミアン』の原稿がフィシャー書店に送られた。『夢日記』が再び書き始められるのは同年12月4日のことである。

---

64) コリン・ウィルソン『アウトサイダー』福田恒存・中村保男訳、紀伊國屋書店、1957年、49頁。